

【草花の部屋】

ヒヤシンス (キジカクシ科ヒヤシンス属 *Hyacinthus orientalis*)

和名：ヒヤシンス(飛信子)、フウシンシ(風信子) **別名**：ニシキユリ(錦百合)

英名：Common hyacinth、Garden hyacinth

キジカクシ目 球根性多年草

原産地：地中海東部

花言葉：スポーツ、遊び、ゲーム、悲しみを超えた愛

花色：赤、桃、黄、橙、白、青、紫



← 写真-1 ヒヤシンス

撮影日：2021年3月18日

撮影場所：奈良市郊外にて

撮影者：M さん



→ 写真-2 ヒヤシンス

撮影日：2021年3月18日

撮影場所：奈良市郊外にて

撮影者：M さん

ヒヤシンスは、秋～冬の間に植えつけると、次の春の初め頃には花を咲かせます。よく目立つ豪華な花で、強い花の香りも特徴です。球根の内部に花芽をもっており、球根の力のみで花を咲かせることができるため、水栽培にも適しています。もちろん、鉢植えや地植えにして育てることもできます。

地下に鱗片葉が層状になった層状鱗茎で、外側が薄い紙状の外皮に覆われている鱗茎をもっています。外皮の色は花色のほぼ同じ色となります。

葉は線形、肉質、全縁で根ぎわから出ます。

花は、葉の中心部から伸びた太い花茎の先に、鐘形～漏斗状で先が6裂した花弁の先が反転する多数の花を総状につけます。

花色は青や赤、黄色など豊富に揃っています。見かけることは少ないですが八重咲種もあるそうです。鉢植えにされることが多いですが－5℃程度まで耐えるので、南関東以西の暖地なら地植えでも育ちます。

ヒヤシンスは、かつては2,000種類ほど品種があったされていますが、現在一般に栽培されているのは50品種ほどだそうです。オスマン帝国で栽培、園芸化され、16世紀前半にはヨーロッパにもたらされ、イタリアで栽培されていたそうです。その後、イギリスに伝わり、盛んに育種が行なわれ、数百の品種が作られたそうですが、イギリス系のヒヤシンスは20世紀初頭に衰退し、現在は品種もほとんど残っていないそうです。現在普通に栽培されるのはオランダを中心に品種改良されたダッチ系とフランスで改良されたローマン系の2系統ですが、ローマン系は強健で作りやすい反面、花が小さくまばらなため、一般的にはダッチ系が普及しているそうです。

日本へは江戸時代末にもたらされたそうです。当時は「ヒヤシント」と呼ばれ、特に黄花種は黄水仙とも呼ばれたそうです。一般に広まったのは大正時代中期以降だそうです。

名はギリシア神話に出てくるスパルタの王子・ヒアキントゥスの名に由来するそうです。

庭植えのヒヤシンスは数年植えたままでも花を咲かせますが、球根に蓄えられている養分が序々に減って花も小さくなっていきます。毎年ヒヤシンスの花を楽しみたい場合は、花後、葉を残して花茎を付け根から切り戻します。その後、緩効性肥料を与え、残った葉が茶色く枯れたようになるまで光合成をさせます。こうすることで球根に養分が蓄えられ、翌年も花を楽しめるようになります。葉が茶色くなった頃に球根を掘り上げて次の秋の植え付けまで休ませることで、球根を良い状態で保存しておけます。

<ちょっと一言>

* キジカクシ科の他ヒヤシンス科、ユリ科で分類されている文献もあります。

* ヒヤシンスの系統

・ダッチ系：

ひとつの茎に、たくさんの花を咲かせ、華やかな雰囲気があります。水栽培にもよく利用されます。球根は自然に分球しにくいいため、増やしにくいという一面もあります。

・ローマン系：

草丈が低く、花は少なめで、可憐な雰囲気を持ちます。ひとつの球根から複数の花茎を出すのも特徴です。球根を分球しやすいため、比較的容易に増やすことができます。